寡黙な騎士団長は花嫁を溺愛する

水無瀬雨音
Amane Minase

RB
レジーナ文庫

登場人物紹介

ドミニク

ヴィオレットの幼馴染。
昔は彼女に意地悪ばかりしていた。

エミリエンヌ

ヴィオレットの親友。
見た目は可愛らしいが、男前な性格。

ルーカス

魔法騎士団第二分隊長でアーノルドの同期。
王宮随一のプレイボーイ。

アーノルド

騎士団長を務めるフィリップ公爵家当主。常に無表情であるため人々から怖がられているが優しく穏やかな性分で、ヴィオレットに一途な美青年。

コンラッド

公爵家の有能な執事。
アーノルドとは幼い頃からの付き合いで、主従関係を超える仲。

テオドール

アーノルドの兄。
公爵家を出て、学者として世界を飛び回っている。

ノア

ヴィオレット付のメイドで姉的な存在。嫁入り先にもついてきてくれた。

ヴィオレット

エルフの血を引く伯爵令嬢。普通の人と違う容姿にコンプレックスを抱いている。男性が苦手だが、アーノルドからの縁談を断れず、公爵家に嫁入りすることに。

目　次

寡黙な騎士団長は花嫁を溺愛する　7

プロローグ　8

1　エルフの先祖返りだとご存知なのですか？　11

閑話（かんわ）　有能執事の独り言　37

2　……可愛い。　41

3　……気持ち悪いですよね。こんな髪の色。　67

閑話（かんわ）　主人の結婚前夜、執事の感慨（かんがい）　101

4　……キスは、二人きりのときに。　103

5　心臓が破裂して、死んじゃうかもしれません。　125

6　一緒にベッドで休みますか？　145

7　……食べちゃうかも。　166

8　あんまり私のこと、甘やかさないで。　186

9　……なんで？　208

10　少しでも、アルにうしろめたいことはしたくないの。　243

閑話（かんわ）　兄との思い出　261

11　ふざけるなよ！　270

12　私を甘やかして、
どこにも行けないようにしたのはアルでしょう。　310

13　アルに出会うために生まれてきたんだね。　330

エピローグ　352

書き下ろし番外編
ヴィオレットが猫を拾う話　359

寡黙な騎士団長は花嫁を溺愛する

プロローグ

いつか、白馬の王子様が迎えに来てくれる。
ヴィオレット・フォン・マッキンリーはそう夢見ていた。
幼い頃から十八歳になった今まで、ずっと。
理想の王子様の身長は、あまり高くないほうがいい。小柄なヴィオレットと差がありすぎてしまうから。
細身だけれどほどよく筋肉があって、顔は優しげだと素敵だ。
金髪碧眼で、声は優しいテノール。さりげなく「愛してるよ」などと甘い言葉をささやいてくれるような、いかにも王子様という人がいい。
もちろん本物の王子様でなくていい。
ヴィオレットだけを大事にしてくれる人であれば、それだけで。
けれど、彼女はその夢が恐らくかなわないであろうことを分かっていた。

ヴィオレットは普通の人間ではないからだ。
母方の祖母がエルフだったらしく、ヴィオレットはその特性を受け継いでいる。
髪は水色で、瞳はアメジストのように輝く紫色。耳は長くて、先がとがっているのだ。
エルフは存在こそ知られているが、人里に姿を見せることは稀で、詳しいことは分かっていない。
いくつかの書物によると、彼らは華奢で肌が白く、長くとがった耳を持つとある。
髪は水色や薄緑など華やかな色が多く、瞳の色素は薄いという。
そして、皆この世のものとは思えないほど美しいらしい。
さらには強い魔力も持ち、とても長寿なのだそうだ。
そんなエルフから受け継いだ容姿により、ヴィオレットは悩みを抱えることとなる。
華やかな水色の髪と紫の目は、彼女の意思とは関係なく、どこにいても注目された。
ヴィオレットの住むオルレーヌ国では、黒や茶色など落ち着いた色合いの髪や瞳を持つ人が多い。そのため、彼女の容姿は目立つのだ。
それだけでなく、ヴィオレットの華奢な体と色白の肌はエルフを連想させ、特にとがった長い耳は、あまりにも普通の人間と異なっていた。
その耳を一目見れば、誰もが彼女はエルフだと言うだろう。

人々はヴィオレットを避け、彼女を遠巻きに見てはひそひそ話をするばかり。
ごく稀に話しかけられたと思うと、大抵は髪と瞳の色、耳の形を揶揄された。幼い頃、男の子たちに「気持ち悪い」「化け物」と言われたこともある。
その記憶は、今でも彼女の中にトラウマとして残っていた。
そんなヴィオレットと違い、彼女の母は普通の容姿で、祖母から受け継いだのは紫の目だけだった。
つまり、ヴィオレットに現れたエルフの特性は、先祖返りというものだ。
エルフだと聞く祖母はヴィオレットが生まれる前に亡くなっているため、会ったことがない。髪は黒く、とがった耳を持たない母が、エルフの血を引いているとは到底思えなかった。そのため、幼い頃のヴィオレットは、本当は自分は両親の子供ではないのかも、と心を痛めたこともあった。けれど両親が愛情を込めてヴィオレットを育ててくれたのは事実だし、母と同じ紫色の瞳には血のつながりを感じている。
とはいえ今でも、「なぜ私はエルフの先祖返りとして生まれてしまったのだろう」と悩み続けていた。
こんな自分が、誰かと恋愛をして結婚できるとは思えない。
だからせめて、白馬の王子様のお迎えを夢想してみる。夢を見ることだけなら、ヴィ

オレットにも許されるのだから。

1　エルフの先祖返りだとご存知なのですか？

「ヴィオレット」
朝食のあと、父のマッキンリー伯爵に呼ばれ、ヴィオレットは緊張で身を硬くした。
「はい」
愛称の「ヴィー」ではなく本名を呼ぶのは、当主として真面目な話をする、ということだ。
「実はお前に縁談が来ていてね」
こほんと咳払いをして、伯爵が言いにくそうに告げる。
伯爵の隣に座る夫人も、複雑な顔をしていた。
ヴィオレットは、突然の話に戸惑いを隠せない。彼女は、男性が苦手だからだ。
幼い頃、人間離れした容姿を男の子たちにからかわれたトラウマから、特に同年代の男性が苦手になってしまった。
伯爵家に男性の使用人はいるが、祖父の代から仕えてくれている者ばかり。皆高齢な

ので、身近な男性で一番年が近いのは父の伯爵である。
そんな状況が、ヴィオレットに若い男性への免疫をますますなくさせていた。
しかし、不安な気持ちがある一方で、浮き足立っている部分もあった。
ヴィオレットは現実の男性が苦手な分、本を読んで理想の男性像を膨らませてしまっていたのだ。
普通の人間ではない自分を、いつか王子様が迎えに来てくれるかもしれない。
ずっとそう夢見てきたヴィオレットは、ドキドキしながら伯爵に尋ねた。
「お相手は、どのような方でしょう」
「その……公爵家の方だ」
「どちらの公爵様ですか」
「アブルーン大陸のマルス王国の方なのだが……」
マルス王国というと、ヴィオレットの暮らすオルレーヌ国から海を挟んだ向こうにある国だ。温暖な気候によるものか陽気な国民性で、近隣には並ぶ国がないほどの大国である。
そんな国の公爵との縁談となれば、条件は申し分ないのに、なぜか伯爵は情報を小出しにしてくる。よほど言いづらい相手なのだろうか。

ヴィオレットはじりじりしながら相手の名前が出てくるのを待った。
伯爵は一つ息を吐いてから、ようやく相手の素性が分かる情報を発する。
「『疾風の黒豹』という二つ名の……」
伯爵の言葉を聞いて、ヴィオレットは目をみはった。
世間の噂話に疎いヴィオレットの耳にすら、その名前は届いている。
アーノルド・フォン・フィリップ公爵。
この春、王宮騎士団の小隊長から昇格し、若くして騎士団長に任命された人物だ。
彼の剣は風のように速く、捉えた敵は絶対に逃さない。
獲物を見据える目は肉食獣のようで、彼の動きのしなやかさと褐色の肌から『疾風の黒豹』と二つ名がつけられたらしい。
剣に滴る獲物の血を見るのが何より好きだとか、物騒な噂も流れている。
ヴィオレットは彼に会ったことがないので、知っていることは噂の域を出ない。
しかし、少なくとも彼女の「理想の王子様」と、彼がかけ離れているだろうことは想像にかたくなかった。
相手が誰か分かった途端、ヴィオレットは地獄の業火に焼かれるような、悲痛という言葉では到底言い表せない気持ちになってしまった。

「ヴィ、ヴィー。大丈夫か」
みるみるうちに表情が硬く、顔色も悪くなっていくヴィオレット。
そんな彼女に、伯爵が思わずといったように声をかける。
「嫌なら、この縁談はお断りを……」
「いいえ……。お受けします」
フィリップ公爵家に比べて、家柄的に格下であるマッキンリー伯爵家から縁談を断ることはできない。そのことを、ヴィオレットはよく分かっていた。
「私はフィリップ公爵との縁談をお受けします。お父様……」
悲痛な声ではあったが、ヴィオレットははっきりと承諾した。
とはいえヴィオレットには、他の人と決定的に異なる点がある。
そこに一縷の望みをかけて、ヴィオレットは伯爵に尋ねた。
「公爵様は、私がエルフの先祖返りだとご存知なのですか？」
結婚相手に、得体の知れない先祖返りの娘をわざわざ選ぶはずがない。知らなかったのであれば……
（フィリップ公爵のほうから、この縁談を白紙に戻してもらえるかもしれない）
そう思ったのだが、ヴィオレットの希望はあっさりと打ち砕かれた。

「もちろん。そのことも含めて、ヴィーが公爵様のお好みにあてはまったそうだ」
「お好み？　……私が？」
ヴィオレットは大きなアメジスト色の目を瞬かせた。男性から好意を向けられたことなどないので、好みだと言ってくれる人がいるとは思わなかったのだ。
「詳しい話はお父様もお聞きになっていないそうだけど、気になるならお会いになってから尋ねてみなさいな」
軽い口調で夫人が補足する。
「エルフの先祖返りを花嫁に望む方が、本当にいらっしゃるのですか？」
目を丸くするヴィオレットを見て、夫人がクスクス笑う。
「少なくとも公爵様はそうみたいね。それにヴィーはとても可愛いわ。私が今まで会った女性の中で一番」
「ご自分の娘だからそう思うだけです。……現に、私はよく男の子にいじめられていましたし」
両親をはじめとする屋敷の人間だけは、昔からヴィオレットを手放しで褒めてくれた。だが、完全に身内の欲目だと思う。
「え？　……ああ、そう。あなた、まだ気づいていないのね。まあいいわ。知らなくて

も問題ないでしょうし」

夫人はうんうんと何度も頷き、一人で納得していた。

気づいていないとはなんのことだろう。聞いてみたものの、のらりくらりとかわされ、結局教えてもらえなかった。

「ヴィーがお嫁に行ったら、離れて暮らさなければならないのは寂しいわ……。でもマルス王国なら数時間で行き来できるから大丈夫よね。映話機もあるし」

映話機は離れた相手と話せる、魔力の込められた道具だ。相手の映像が映し出され、会話をすることができる。平民にはおよそ手の出ない代物だが、貴族の間ではごく普通に使われていた。きっと公爵家にもあることだろう。

大陸間には橋が架けられており、魔法で走る汽車を使えば短時間で往復できる。そのため、離れたところにある他国とはいえ、それほど距離を感じることはないだろう。

夫人が席を立ち、優しくヴィオレットの手をとった。

「色々噂はあるけれど、騎士団長を任されるなんて、実力も人格も優れている何よりの証よ。あなたは噂に惑わされず、公爵様だけを信じなさい」

「はい……。お母様」

ヴィオレットは素直に頷いたものの、夫人の言葉は心に響かなかった。悲愴感は消え

ず、重い鉛玉を呑み込んだような気分だ。

一方で、こんな自分を選んでくれるなんて、とてもありがたいことだと思う。しかも相手は公爵かつ騎士団長ととても地位が高く、もったいないくらいだ。

多少の難があるのだとしても、ヴィオレット以上に条件のよい令嬢との縁談がいくらでもあっただろう。

（私の何を気に入ってくれたのかは分からないけれど、この縁談から逃れられないのであれば、精いっぱい妻として努めよう。私を選んでくれたことをできるだけ後悔させないように）

ヴィオレットはそう心に決めたのだった。

✽ ✽ ✽

ヴィオレットに縁談が来る数か月前のこと。

フィリップ公爵家の当主アーノルドは、久しぶりの休日を自分の屋敷で過ごしていた。

二十八歳にして、王宮騎士団の団長に任命された彼には、なかなか休む暇がない。

アーノルドは、褐色の肌と金髪碧眼を持った美丈夫である。

マルス王国において、褐色の肌は一般的だ。しかし、この国では濃い色の髪と目を持つ人が多く、金髪碧眼は珍しい。

彼の髪と目は、外国から嫁いできた前公爵夫人から受け継いだものだ。

長身で、きりっと整った顔立ちをしており、常に無表情なせいか子供には怖がられてしまうことが多い。

そんな彼は、目立つ見た目に反して無口かつ内向的である。

一年を通して暖かいマルス王国の国民は陽気で明るく、特に若者は暇さえあれば街に出て異性と遊んでいる。

しかしアーノルドは、この休日に屋敷から出ようとはせず、庭で剣の素振りをしていた。

そんな彼を見て、執事長のコンラッドが「若いのに他にすることはないんですか」と嫌味を言ってきたため、今は自室に引っ込んでいる。

コンラッドの両親はフィリップ公爵家に仕えており、アーノルドと彼は兄弟のように育った。コンラッドが執事としてアーノルドに仕えるようになってからも、その関係は変わっていない。

「アーノルド様、いらっしゃるんでしょう？　入りますよ」

形だけのノックをしたコンラッドが、ドアを開けて入ってきた。

いつも通りきっちりと銀髪を撫でつけた彼は、銀縁のメガネを押しあげながら、その奥の青い目を鋭く光らせる。

コンラッドも肌は褐色だが、髪と目の色は外国から嫁いできた母親に由来する。

彼は呆れ顔で、窓際のソファーに腰かけたアーノルドに近づいた。

けれどアーノルドはコンラッドを完全に無視して、熱心に剣を布で磨いている。

アーノルドはいつも、休日に素振りや道具の手入れをしたり、戦術の本を読んだりするのだ。

はーっと剣に息を吹きかけ、布で磨き上げると、アーノルドはぴかぴかになったそれに自分の顔が映り込むのを見て頷いた。

一方コンラッドは、苦々しい顔で主人を見つめる。

「私は先ほど『街にお出かけになってはいかがですか』というつもりで、声をかけたんですがね」

「……街に出てもすることがないから、家にいるほうがいい。街に出たら女性にも絡まれるし、面倒くさい」

アーノルドは磨き終わった剣をサイドテーブルに置く。

すらりとした長身に、きりっと整った顔立ちのアーノルドは、女性から誘いを受ける

ことが多い。この国の人間にしては珍しく口下手なところも、「可愛い」らしい。
アーノルドが女性から言い寄られるのにうんざりしていることを、コンラッドは当然知っている。けれどこのおせっかいな執事はそんなことにおかまいなく小言を言ってくるのだ。
アーノルドは、何かコンラッドの気をそらせるものはないかと視線を走らせ、彼の手に擦り傷があるのを見つけた。
「手……怪我してる」
アーノルドの言葉に、コンラッドは自分の手に視線を落とす。
「ああ、本当ですね。でも、擦り傷なので大丈夫ですよ」
その言葉を無視して、アーノルドはコンラッドの傷に手をかざし、呪文を唱えた。
「……アウローラクラルスクーラト」
しばらくしてアーノルドが手をのけると、傷はすっかり治っていた。回復魔法を使ったのだ。
アーノルドをはじめとして、ほとんどの貴族は魔力を持っている。魔力の量は爵位の高さに比例するとされており、魔力を持っている平民はかなり稀だ。
アーノルドは公爵にしては魔力が少ないほうだが、簡単な魔法を使うのに問題はない。

魔法は地、水、風、火、光、闇の六つの属性に分類され、その中で自分に合った属性の魔法しか使えない。
『疾風の黒豹』として人々から恐れられているアーノルドは、攻撃力の高い火属性だと思われがちだが、回復魔法を主とする光属性の魔法を得意としていた。
「……気をつけろよ。じゃあな」
「はい。ありがとうございます、アーノルド様」
頭を下げて部屋を出ようとしたコンラッドは、すぐに踵を返した。
「って、そうじゃない。私はまだ本題を話していません」
コンラッドは幼い頃からアーノルドとともに過ごしてきたため、物言いに容赦がない。
「……ちっ」
戻ってきたコンラッドに、アーノルドは舌打ちする。
「私はずっと、早く結婚しなさいと言っているじゃないですか。騎士団長ともなれば妻がいたほうが好ましいですし、妻帯者は女性にしつこく絡まれませんよ」
騎士団長に就任してからというもの、コンラッドは「早く結婚しろ」とうるさい。
アーノルドは顔をしかめた。
「あんたもう二十八ですよ？」

「……さっきは『若い』って言った」
のらりくらりとこの話題から逃げようとするものの、コンラッドのギラギラした双眸からは、今日こそは逃すものかという強い意思を感じる。
確かに二十八歳という年齢は若いが、この国の貴族の結婚適齢期は成人である十八歳から二十代前半だ。公爵家の人間ともなれば、成人してすぐに結婚していても珍しくはない。
「あんた、未婚のままですむと思ってませんよね？　ご希望がないなら私の好みで相手を選び、縁談をとりつけますが」
しつこいコンラッドに辟易して、アーノルドはようやく重い口を開いた。
「……理知的で思慮深く、控えめ」
「はい。あとは？」
これはコンラッドも想定していたようで、先を促してくる。
「……小柄で小動物っぽい人」
「小動物……。庇護欲をそそられるとかですか？　あんたそんななりして、可愛いもの好きですもんね。で、あとは？」
「エルフ」

「はぁ？」
最後に出した条件に、コンラッドが声をあげ、アーノルドを睨みつけた。主人を見ているようには到底思えない鋭い眼光だ。まさか主人が人外の相手を望むとは、さすがの彼も思わなかったのだろう。
「その条件に完璧にあてはまる女性がいるなら、結婚でもなんでもしてやる」
アーノルドはぶっきらぼうに言った。
ともあれ、これだけの条件に合致する、適齢期の令嬢などいるはずがない。
（これでしばらくは平穏に暮らせる）
拳を握り締めてわなわなと震えるコンラッドを無視して、アーノルドは戦術の本を開いたのだった。

だがアーノルドの予想を大きく裏切って、平穏は三か月と続かなかった。
その日、帰宅したアーノルドが自室に入ると、コンラッドはこほん、とわざとらしく咳払いをして口を開いた。
「ご結婚のことですが」
（まだ言っているのか。しつこいやつめ）

アーノルドは眉をひそめながらソファーに腰かけた。
家督をアーノルドに譲り、ほとんど家を空けている両親は「仕事が忙しい間は無理に結婚しなくてよい」と寛容だ。しかし、コンラッドはアーノルドが成人してからというもの、「結婚して跡継ぎを作るのは貴族の義務だ」と口うるさかった。
騎士団長に就任してからはさらにひどくなり、「結婚しろ」「跡継ぎを作れ」とオウムのように繰り返していた。結婚相手に求める条件を伝えてからはしばらく何も言われなかったので、もう諦めたものだと安堵していたのだが……
もちろん、跡継ぎを作るのが貴族の義務であることは十分理解している。だが、ゆくゆくは養子をとるか、兄の子供に家を継がせればよいと考えていた。
そもそも、アーノルドが出した条件にあてはまり、かつ悪名高い『疾風の黒豹』に嫁いでもいいという奇特な女性がいるとは思えない。
ささやかれている噂は根も葉もないものだが、街で声をかけてくる女性たちだって、アーノルドが『疾風の黒豹』だと分かれば、ほとんどが逃げていくに違いない。
「そんなに公爵家の跡継ぎがほしければ、兄上に公爵位を継いでいただけばいい。……兄上のほうが当主にふさわしいのだから」
兄に家を継ぐ意思がなく、父も次男であるアーノルドが継いでもかまわないというか

ら、現在当主をしているだけだ。アーノルドは兄が爵位を受け継ぐ気になるまで、家を預かっているという意識が強い。
「あんた、まだそんなことを言ってるんですか。あのバカは年単位で帰ってこないんだから、いい加減諦めてください」
アーノルドは爵位を継いでから、たびたび「自分より兄がふさわしい」と言っていた。さすがに聞き飽きたらしいコンラッドは、アーノルドの言葉を一蹴し、淡々とある知らせを告げた。
「結婚式が一月後に決まりました。聖堂も押さえて、招待状もお出ししております。王宮への休暇申請も終えました」
「……冗談がすぎる」
信じがたくて悪態をつく。
「冗談だと思われるなら、ご友人や相手の女性に確認してください」
普段通り飄々としているコンラッドに、無性に腹が立つ。
話がここまで進んでしまっていたら、今から白紙に戻すのはさすがに無理だろう。
「条件がかんっぺきにあてはまる女性となら、結婚するんですよね？　ご自分のおっしゃられたことはたがえませんよね、騎士団長？」

コンラッドはわざと煽るような言い方をしてきた。

「……するよ。すればいいんだろ」

渋々ではあるが了承したアーノルドに、コンラッドは満足そうに頷いた。

「私があらゆる伝手を使って、相手を探したんですからね！　そう言ってもらわないと困ります。いつもそうやって素直だったら助かるんですが。アーノルド様も昔は『コンラッド、コンラッド』ってあとをついてきて可愛らしかったのに、最近は反抗するようになって……あ、覚えてます？　私の仕事を手伝うって言ってくれたのはいいんですけど、干そうとした洗濯物を全部庭にぶちまけて、メイドのマリーに二人で怒られて夕食抜きに――」

コンラッドが懐かしそうに話しはじめたのを聞き、アーノルドはため息をついた。

（……思い出話なんて、コンラッドも年をとったな）

コンラッドはまだ三十歳になったばかりだが、最近妙に年寄りくさくなった気がする。ここまで来てはもう逃げられないので、結婚はする。

だが、いくらもしないうちに花嫁は逃げ出すだろう。自分は女性を楽しませることができない面白みのない人間である上、悪名高い『疾風の黒豹』なのだから。

✽　❀　✽

結婚まで一月弱。

縁談を受けてからのヴィオレットは多忙だった。

マルス王国のマナーを学ぶため、家庭教師がついたからだ。オルレーヌ国とマルス王国は言語も違うが、ヴィオレットはすでにマルス王国の公用語を修得していたため、新たに覚える必要はなかった。

公爵家からは多額の支度金やドレスや靴が贈られた。ただ贅を尽くしているだけではなく、どれも趣向が凝らしてある。

すぐさまヴィオレットがお礼の手紙を送ると、執事長が代理で返事をくれた。公爵は手紙をしたためるのが苦手なのだそうだ。

その手紙には、次のようなことが書かれていた。

贈り物が気に入ってもらえたことを、公爵も喜んでいる。色々な噂を聞いているだろうし他国に嫁ぐ不安もあると思う。けれど、ヴィオレットに苦労をかけることは絶対にないので、心配しないでほしい。

特に、『主人は見た目は怖いかもしれないし誤解されやすいですが、決してヴィオレット様に害をなすことはありません』と強調してあったのには、思わず笑ってしまったのだった。

そうしているうちに結婚の準備は着々と進み、厳しかった冬ももうすぐ終わろうとしていた。春が来れば、オルレーヌ国では色々な花が咲き誇る。ヴィオレットは、その様子を楽しむ前にマルス王国へ行くことになる。

「ヴィオレットお嬢様、よろしいでしょうか」

自室で荷物の整理をしていると、短くドアがノックされた。

ヴィオレットの側仕えである、メイドのノアだ。彼女は、ヴィオレットが幼い頃から面倒を見ており、嫁ぎ先にも一緒に来てくれることになっている。

そのためにノアはマルス王国の言葉を勉強し、今では日常会話程度は話せるようになった。

「どうぞ、入って」

ヴィオレットが声をかけると、ノアが一礼して部屋に入ってきた。

「エミリエンヌ様がお見えなのですが、お通ししてもよろしいですか？　それとも、応

接室でお話しになりますか？」

ノアは言いながら、ヴィオレットが広げていたものを見回す。

「すぐ片づけるから、こっちに通してもらってかまわないけど」

エミリエンヌとは気心が知れた仲なので、散らかっている部屋を見られたところで問題はないし、彼女もそれをうるさく言う性格ではない。

「かしこまりました。……あー、それからお連れの方がいらっしゃるのですが、その方もお通ししてよろしいでしょうか？」

普段、はっきりした物言いをするノアにしては歯切れが悪い。

「誰か分からないけど、もういらっしゃっているなら、お帰りいただくわけにはいかないでしょう。お通しして」

エミリエンヌがヴィオレットの会いたくない相手を伴ってくるとは思えないから、問題ないだろう。

ヴィオレットが了承すると、間もなくしてノアがエミリエンヌを連れてきた。

「ヴィー、久しぶりー」

笑顔のエミリエンヌのうしろに、「お連れの方」が立っている。

「よ、よう。久しぶり、だな」

エミリエンヌと一緒に現れたのは……幼馴染のドミニクだった。
「なんでドミニク？」
突然現れたドミニクに、ヴィオレットは困惑の色を隠せない。
正直、ヴィオレットは彼に二度と会いたくなかった。本人を前にして口には出さないが。
「ヴィーに話があるみたいでね。いきなり連れてきてごめん。先に言うと、ヴィーが嫌がると思って。なんか粗相したら、即首根っこひっつかんで屋敷から追い出すから！」
エミリエンヌにそこまで言われて、もう来てしまっている相手を追い返すことはできない。
「う、うん。とりあえず、二人とも座って」
ヴィオレットは二人に座るよう促した。
ドミニクの隣にエミリエンヌ、テーブルを挟んで向かい側のソファーにヴィオレットが座る。ノアは、お茶とお茶菓子のクッキーをテーブルに置いて一礼すると退室した。
男性が苦手なヴィオレットは、よく知った幼馴染であっても顔を直視することができない。
一方のドミニクも緊張しているのか、やたら唇を舐めている。きょろきょろと部屋を見回したり何度もお茶を飲んだりと、なぜか落ち着かない様子だった。

久しぶりにドミニクに会い、ヴィオレットは知らず知らずのうちに昔のことを思い出してしまった。
彼女は幼い頃、ドミニクをはじめとした貴族子息たちに、髪と目の色が皆と違うのはおかしいとからかわれていた。
会うたびに髪の毛を引っ張られるので、睨みつけて、「嫌い！　やめて！」とはっきり拒絶したこともある。ところが、余計にひどくからかわれるようになったので、そのうち外出を控えるようになったのだ。
成長すると、昔ヴィオレットをいじめていた子息たちは、なぜか彼女を歌劇や食事に誘いはじめた。これも新たなからかいの手口なのだろう、と警戒したヴィオレットは、決して誘いには乗らなかったけれど。
「ちょっと、あんたお茶飲みに来たわけ？　早くしゃべりなさいよ」
エミリエンヌは長い栗色の髪を結いあげ、流行の髪形にしている。ピンク色のドレスを身に着けていて見た目こそ可愛らしいが、性格は結構男っぽいところがある。
今もドミニクの腰のあたりに、がんがん肘鉄を入れていた。
乱暴に促され、ドミニクはようやく重い口を開く。
「ヴィオレット、結婚するんだってな。『疾風の黒豹』と」

「……そうだけど」
それがどうしたのか。ドミニクには関係ないはずだ。ヴィオレットは思わず眉をひそめた。
「なんでわざわざ『疾風の黒豹』なんかと結婚するんだよ。……オ、オレと結婚すれば実家も近くだったのに」
「縁談を申し込まれたから。っていうか、なんでドミニクと私が結婚するの？」
心底不思議に思って、ヴィオレットは大きな目をパチパチさせる。
「なんで……って」
拳をぎゅうっと握り締めて、ドミニクはしばらく逡巡する。そして、意を決したように顔をあげた。
「昔っからお前のことが好きだからだよ！　ずっと気を引こうとしてただろうが。鈍いんだよ、お前！」
ヴィオレットは怒鳴られて、一瞬びくっと肩を震わせる。そして、怪訝な顔をした。
「……気を、引く？　私、髪を引っ張られたりからかわれたりした覚えしかないんだけど。あんなことされたら、嫌いにはなっても、絶対に好きにはならないよ」
ヴィオレットの言葉を聞いて、エミリエンヌはクッキーを頬張りながら言う。

「『好きなら意地悪するのやめな』って言ったのに、やめないからよ。あんたらのせいで、この子は男嫌いになったんだからね。とりあえず謝れ」
「うっ……そこまで嫌がってると思ってなくて……。ただ、お前の髪と目の色がすごく綺麗で、近くで見たかったんだ。からかったら、お前が涙目になって反応してくれるのが可愛かったし……。でも、外に出なくなったのはそのせい、なんだよな。謝ってすむと思ってねーけど、ごめん」
しどろもどろに言葉を紡ぎ、ドミニクが深々と頭を下げる。
幼いヴィオレットはドミニクたちに大変傷つけられた。その記憶は今も心に深い傷跡を残している。これからも多分癒えることはないだろう。だが、ヴィオレットは優しく言った。
「いいよ、もう。頭をあげて。正直、今すぐ許すのは無理だけど、わけを話してくれたからいい。それに、私が外に出なくなったのは、ドミニクたちだけのせいじゃないもの」
「ありがとう、ヴィオレット……。あの、これ、結婚祝いっつーか、お詫びっつーか。半年前、うちの店に入荷したのを買ったんだ。お前に似合いそうだったから、ずっと渡したかった。もらってくれたら嬉しい」
顔をあげたドミニクは、綺麗に包装されたプレゼントをテーブルにのせた。

彼は両親である、ノアイユ伯爵夫妻が営む宝石店で働いている。プレゼントの包装紙は、その店のものだった。

「開けてもいい？」

「もちろん」

ヴィオレットの細い指がするっとリボンをほどき、包みを開いていく。現れたのは、アメジストと金で作られた、小さな蝶のネックレスだった。

「これを初めて見たとき、ヴィオレットの瞳の色にそっくりだと思った。ヴィオレットにすっげー似合うだろうなって。ヴィオレットはシンプルで可愛いものが似合うよな！エミリエンヌはごてごてしたものしか似合わねえけど！」

「……は？　あんた私に喧嘩売ってる？」

いきなり貶められたエミリエンヌは、じろりとドミニクに睨みを利かせた。

ヴィオレットはケースに収められたネックレスに視線を落とす。

「……可愛い」

思わず頬を緩ませると、なぜかドミニクは握り締めた拳を、ガンガン膝に打ちつけはじめた。

エミリエンヌがその様子を「うわー……引くわー……」と生暖かい目で見ている。

「だ、大丈夫？　お医者さん呼ぶ？」

状況が分からず狼狽するヴィオレットに、エミリエンヌがぱたぱたと片手を顔の前で振った。

「病気じゃないから。……あー、頭はおかしいけど、大丈夫」

ドミニクは無言でエミリエンヌを睨みつけていたが、とりあえず具合は悪くなさそうだ。

「でも、こんなのもらえない。これ、アメジストでしょう？」

高価なものなのが容易に想像できたので、ヴィオレットは小さく首を横に振って断る。

「お前に買ったんだから、もらってくれ。頼む、ヴィオレット」

ドミニクは食い下がったが、そんなわけにはいかない。

「もらってあげてよ、ヴィー。こいつ荒稼ぎしてるんだから、値段なんて気にしなくていいよ。いらなければ売り払って、ヴィーのおこづかいにすればいいわ」

「……分かった」

荒っぽい言い方ではあったが、これがエミリエンヌの優しさだ。そんな彼女の後押しもあって、ヴィオレットは受けとることにした。

「ありがとう、ドミニク。大事にする」

ネックレスを胸元に当て、ヴィオレットは微笑んだ。
するとドミニクは、ぽーっとした顔で見つめてきて、しばらくしてはっと我に返った。
「あの、さ。今さらなんだけど、もしオレが、縁談を申し込んだら……受けてくれたか？」
「うーん」
ヴィオレットは形のいい唇に人差し指をそっと当てて、考え込んだ。
「ちゃんとした手順で申し込んでくれれば、からかってるわけじゃないって分かるし、受けたと思う。……私は、私に好意を持ってくれているなら誰でも嬉しかった。ドミニクでも、フィリップ公爵でも」
「……そうか。ありがとう。絶対、絶対幸せになれよ！　っていうか、幸せになれなかったら帰ってこい。オレが嫁にもらってやる」
「あ、ありがとう」
「もらってやる、じゃなくて嫁に来ていただきたい、でしょうが。それに嫁ぐ前からそんなこと言うって、どうなの」
クッキーをほぼ一人で平らげたエミリエンヌは、頬を緩ませたドミニクに呆れ顔で突っ込んだ。

閑話　有能執事の独り言

（とうとうアーノルド様を結婚させることに成功した）
結婚式の準備をして、自分の部屋に戻ったコンラッドは、これまでのことを思い返してニヤニヤしてしまった。
アーノルドが嫌そうな顔で結婚を了承したときには、思わず心の中で大きくガッツポーズをしたものだ。
彼が結婚相手に求める条件として「控えめ」や「小柄」をあげてくるのは予想の範囲内。積極的な女性に辟易していたようだし、背の低い女性が可愛らしく思えるのは理解できる。
マルス王国の女性は皆積極的だから、外国から花嫁を探してくることになりそうだ、と思っていた。
ところが、「エルフ」と言い出したときには『寝ぼけてるんですか？』と嫌味の一つでも言いたくなった。

アーノルドは、そんな女性はどこにもいないと高を括っていたのだろう。
しかし、コンラッドはアーノルドを何がなんでも結婚させなくては、という思いを抱いていた。
すると、思いのほか早く、隣の大陸にある国の令嬢で条件にあてはまる女性が見つかったのだ。
かくしてコンラッドは、アーノルドが簡単に縁談を白紙に戻せないよう、本人の知らないうちに結婚の準備を進めることに。
まずは前公爵夫妻に結婚が決まったことと、式の日取りを映話で知らせた。
大旦那たちは二十代のうちの結婚というものをあまり重要視していないようで、「ふーん」となんとも軽い返事だった。
だが、息子の結婚は嬉しいようで、式に合わせて屋敷に戻るという。
コンラッドが相談せずに結婚相手を決めたことを謝罪すると、『コンラッドが選んだ女性なのだから問題ないだろう』と言ってもらった。一介の使用人を信用しすぎなのではないかと心配な反面、嬉しいのも確かだ。
次は、アーノルドの兄であるテオドールに連絡をとった。
テオドールは学者をしていて、世界中を飛び回っている。今もマルス王国から遠い国

にいるようだ。
そんな彼にアーノルドの結婚相手が決まった旨を伝えると、コンラッドは質問攻めにあった。
『結婚相手は美人？　えっ、エルフぅー？　おいおい、アルはそんな趣味なの？　っていうか、コンラッド、そんな女性よく見つけたな。エルフは長寿って聞くけど、年は二百歳とかじゃないよね？　って、ちょ、十八歳？　アルは二十八だろ？　十歳も違うじゃん！　……へー先祖返りのエルフなんだぁー。会うの楽しみだわ。で、式はいつなの？　……ええー？　一か月後？　ダメだよ、オレ、今アトランビスワニの出産観察してっから。オレがアトランビスワニを手なずけるのにどんだけ苦労したと思ってんのー。もし出産するところを見られたら、世界初なんだよ！　アトランビスワニはさー――』
……延々とワニの話が続きそうなので、強引に映話を終了した。テオドールから幾度か映話の接続を求める通信が入るが、ひたすら拒否する。
コンラッドとテオドールの仲は決して悪いわけではないが、彼はアーノルドと正反対で多弁なので、話していて疲れる。
（というか、どんなワニだか知らないが、仲のいい弟とワニ、どちらが大事なんだ）
そんなこともあったけれど、アーノルドの結婚準備は順調だ。

コンラッドはこの結婚を祝うため、手に入れたばかりのワインを開けることにした。チーズとオリーブをつまみに、祝杯をあげる。

今日は特に美味(うま)く感じられ、いつのまにか瓶(びん)の中身は半分になってしまった。

アーノルドの結婚が決まり、のどに刺さっていた魚の骨がとれたようにすがすがしい。

同じ貴族とはいえ、縁談を申し込んだヴィオレットは小国の伯爵令嬢。権力の差や国同士の関係を考えると、断ることはできないだろうと踏んでいた。

予想通りマッキンリー伯爵は結婚を快諾(かいだく)したが、一つだけ条件をつけてきた。

『エルフの先祖返りである娘を求めてくれるのは大変ありがたいが、彼女をエルフではなく人間として扱ってほしい』というものだ。

人間の両親から生まれたのだから、彼らが娘を人間として育てることは、ごく当たり前のことだろう。彼らの手を離れたあとも、そのように過ごしてほしいと願うことも。

これについては、アーノルドも快く了承(りょうしょう)した。

オルレーヌ国は小国であるがゆえ、非常に閉鎖的かつ排他的だ。エルフの外見を持つヴィオレットには、大変住みにくかっただろうと想像できる。

その点、マルス王国は大国であるため人が集まりやすく、外国人も多い。ヴィオレットもさほど浮かないだろうから、過ごしやすいに違いない。

心配なのは、彼女とアーノルドとの相性だ。コンラッドも、ヴィオレット本人と会ったことはないので、実際にアーノルドが彼女を気に入るかどうかは分からないのだ。

また、アーノルドが女性と親しげにしているのを見たことがほとんどないため、彼が花嫁に対してどのように接するのかも、あまり想像できなかった。

堅物のアーノルドは、ヴィオレットの好(この)みではないかもしれない。

――いや、まあ、アーノルドも見た目は高レベルだし、なるようになるだろう。

（場は整えたから、あとはなんとかしてください。アーノルド様）

コンラッドは、心の中でそう呟(つぶや)いた。

2　……可愛い。

いよいよ結婚式が翌日に迫り、ヴィオレットがフィリップ公爵家にやってくることになった。マッキンリー伯爵夫妻は、仕事の都合でヴィオレットより遅れてくるという。

アーノルドは、今日から一週間休暇をとっているにもかかわらず、なぜか騎士団の詰め所にいた。

王宮騎士団は、騎士団と魔法騎士団の二つに分けられる。
騎士団は剣などの武器を使って戦い、魔法騎士団は魔法を使って戦う。そのため、魔法騎士団は貴族で構成されており、逆に騎士団には平民が多く所属していた。
どちらの騎士団も第一分隊と第二分隊から編成されており、それぞれに分隊長がいる。騎士団の第一分隊と第二分隊を統括するのが、騎士団長であるアーノルドの役目だ。
近年は近隣諸国との関係が落ち着いており大規模な戦争がないので、城や街を警備し、国の治安を守るのが主な仕事になっている。
また、人に悪さをする魔物を討伐しに行くこともあった。
アーノルドは、普段通り部下に訓練をつけてから軽く遠乗りに行ったあと、馬房に戻した馬に水を与えているところだ。
その馬は、騎士団長になったときに国王陛下から与えられた、毛並みの美しい黒馬だ。
「……撫でてやろうか？」
同意するように馬が首を縦に振ったので、アーノルドはブラシを手にとる。そのとき、アーノルドの背後から風が吹き抜け、ブラシを彼の手から払い落とした。
風魔法だ。
小さなブラシだけを狙うには、かなりの技術がいる。犯人が分かったアーノルドは、

うしろを振り返った。
「今日、お前の嫁が来るんじゃなかった？　休暇とってたよな」
悪友のルーカスがへらへらとしまりのない笑みを浮かべ、片手をあげて近寄ってきた。
ルーカスはアーノルドの同期で、魔法騎士団第二分隊長を務めている。外見はチャラチャラしているが、次期魔法騎士団長と目される実力者だ。
アーノルドは地面に落ちたブラシを拾いあげながらルーカスの問いに答える。
「……来るのは昼前だ。コンラッドには急用があると言って出てきた」
諦めの悪いアーノルドに、ルーカスは呆れた顔をした。
「そろそろ昼前だぞ。もう結婚からは逃げらんねえんだから、いい加減覚悟を決めろ。まー、オレはまだまだ遊ぶけどー」
ルーカスは騎士団きってのプレイボーイだ。彼は、王宮の年若いメイドの多くと一夜をともにしたことがあるらしい。
しかし、手をつけた女性の誰ともいざこざを起こしたことはない。むしろ彼女たちはルーカスと関係を持ったことを自慢するほどだ。
なんでも、ルーカスと一夜をともにした女性は、より魅力的になるらしい。その後結婚が決まった、彼氏ができた、というメイドが多く現れ、王宮内では一種の伝説のよう

になっている。
そんな彼は、ひとたび街へ出れば、アーノルドと一緒であろうが、美人に声をかけないと気がすまないらしい。
上手く話がつくと、アーノルドと別れて、そのまま女性の肩を抱いて行ってしまう。
そのようなことがたびたびあるにもかかわらず、ルーカスと一緒に出かけてやるアーノルドは、自分でも寛容だと思っている。
そのときルーカスがふと、馬房の入口の人影に気づいて声をあげた。
「あ、コンラッド」
アーノルドもつられてそちらを見ると、険しい顔をしたコンラッドが、副団長のフリッツとともにこちらに向かってくるところだった。フリッツがコンラッドを案内してきたらしい。
無言で逃げようとしたアーノルドの腕を、察したルーカスが掴む。
「……離せっ！」
「コンラッドを困らせちゃダメだろ」
もみ合っているうちに、コンラッドが目の前にやってきた。
「アーノルド様、すぐ屋敷に戻りますよ。忙しいんですから、駄々をこねないでください」

コンラッドには、力ずくでアーノルドを引っ張っていくことはできない。そう思っていたら、ルーカスが余計な提案をする。
「オレがこのまま馬車まで連れてってやろーか？　コンラッドじゃ力負けするだろ」
「それは助かります、ルーカス様」
「ルーカス！　お前、裏切ったな……！」
「この件に関しては、もともとお前の味方じゃねーし」
アーノルドはぎりぎりと歯ぎしりをしたが、ルーカスはまったく意に介していない。
彼はアーノルドの腕を掴んだまま、黙って様子を見ていたフリッツに声をかける。
「あとは自分に任せてください。というか、副団長自ら案内しなくても、下級騎士に任せればよかったんじゃないですか？」
「お急ぎのご様子だったからな。それに私が行くのが一番早かった。……まさか団長ともあろう方が、結婚から逃げ回っていたとは存じませんでしたが。では、失礼します」
慇懃無礼に言って、フリッツはその場を立ち去った。
ルーカスはしばらく彼のうしろ姿を見つめる。
「アーノルド。お前、優しいのはいいけどさー、副団長の態度はあれでいいのかよ。上司に対してどうかと思うぞ」

「……仕事ぶりは問題ないから、別にいい」
「まぁお前が納得してるならいいけど。さっ、きりきり歩け！」
「……ルーカス、恨むぞ」
「本当に時間がないんですから！　アーノルド様！」
コンラッドとルーカスに引きずられるようにして、アーノルドは馬車に押し込まれた。へらへらしたルーカスの笑顔に見送られながら座席に腰を下ろした途端、馬車が出発する。
御者は、普段よりスピードを出したらしく、あっという間に屋敷に到着したのだった。

✽ ✽ ✽

「アーノルド様！」
到着したあと、コンラッドは「着替えてください」と言って部屋に押し込めたのだが、彼はその後一向に出てくる気配がない。しびれをきらしたコンラッドは、ノックもせずにドアを勢いよく開いた。だがそこに、アーノルドの姿はない。
部屋の中を見回すと、ベッドの上掛けが膨らんでおり、そこから金色の髪がのぞいている。上掛けをめくろうとするが、アーノルドは腐っても騎士団長だ。力では一介の執事長ごときに勝ち目はない。

「……お腹痛い」
布団の中から弱々しい声が聞こえてくる。そんな主人に呆れ返り、コンラッドは声を荒らげた。
「子供みたいな嘘をつくんじゃありません！　マクドール先生をお呼びして、腹痛に効く苦い薬湯を作っていただきましょうか」
マクドールは、長年フィリップ公爵家が抱えている医師だ。幼い頃に飲んだ薬湯の味を思い出したのか、アーノルドは慌てて前言を撤回する。
「お腹は治ったけど、急に眠たくなった」
「やっぱりマクドール先生をお呼びして、薬湯をいただきましょう。ばっちり目が覚めます」
「……嫌だ」
「もう、アーノルドったら」
いつのまにかやってきた前公爵夫人が『可愛いわね』とでも言いたげに、息子の髪の毛を眺める。

前公爵夫妻は、昨日旅行先から帰宅していた。
夫人は外国から嫁いできたため、金髪碧眼に白い肌を持っている。
「お嫁さんをお待たせしたら悪いわね。私は彼女が到着したらすぐ行けるよう、一階で待っているわ」
息子の相手は任せたとばかりに、夫人はさっさと部屋を出ていった。
コンラッドはため息をついて、声を張りあげる。
「この期に及んで、往生際が悪いですよ！　騎士団長ともあろう人が、男らしくないですねぇ。部下たちが知ったらどう思うでしょうか」
「……」
騎士団長としてのプライドを刺激され、アーノルドはのろのろとベッドから這い出た。だが、そのあとの動きもひどく緩慢だったので、着替えは一向に進まない。
「私が着せて差しあげましょうか？　あーもう、ほら。馬車が着きました。もうすぐヴィオレット様が降りてこられますよ」
一応花嫁のことは気になるのか、アーノルドはコンラッドの隣に立ち、窓から馬車を見守る。
先にメイドが馬車を降り、続いて御者の手をとって小柄な女性がゆっくりと降りてきた。

あれがヴィオレットだろう。幅広の帽子を目深にかぶっていて、彼女の少しうしろを歩くメイドより頭一つ分ほど小さい。ドレスからすんなりと伸びた腕は華奢だ。
ヴィオレットは待っていた夫妻の前に進み出て、優雅に淑女の礼をとる。
それは完成されたダンスのように美しかった。
アーノルドがいつのまにか、窓に張りつくようにして見ている。そのことに、本人は気づいていない。
顔はまだほとんど見えないが、その優雅な仕草や可愛らしく小柄な体形に、アーノルドは強く惹きつけられたらしい。
「……可愛い。コンラッド、ここは天国だったか？　あそこにいるのは天使？　妖精？　すごく小柄だけど、本当に成人しているのか？　……あんなに可愛らしいのに、オレなんかとの結婚を承諾するはずがない。もっといい条件の嫁ぎ先がいくらでもあったはずだ。オレから国の機密を聞き出そうとする密偵なのでは？」
珍しく口数が多いアーノルドに、コンラッドは驚きながらも主人の問いに答える。
「まず落ち着いてください。あんた、自分がかなりスペック高いの、まだ分かってないんですか。それに、普通に考えて、伯爵家は公爵家から縁談を持ち込まれたら断れませ

んよ。成人しているのかとか、絶対ヴィオレット様に聞かないでくださいよ。気にされてるかもしれないんですから。大変お可愛らしい方でよかったですね！　エルフだから、お顔もきっとお綺麗です。さ、早く着替えてご挨拶を……って、なぜまたベッドに潜っているんですか⁉」

コンラッドはアーノルドから上掛けをはごうとするが、先ほどと同様にどうにもできない。

「……あんなに可愛い人の隣に、オレなんかが並べない。彼女もオレの噂を知っているはずだ。怖がっているに決まっている」

「だから、あんたスペックはかなり高いですから。いい加減嫌味かな？　って思えてきますよ」

こほん、と咳払いして、コンラッドはまた口を開いた。

「いいですよ。婚約解消しても」

ぴくりと上掛けが動く。

「あんなにお美しいのですから、すぐに他の方との縁談があるでしょうね？　いいんですかね。ヴィオレット様が他の人のものになっても。あるいは、今までは深窓の令嬢ということで、あまり知られていなかったようですが、エルフの先祖返りだということが

分かれば、研究機関に拉致されるかもしれません」

コンラッドが言うと、ばっと上掛けが宙を舞う。

先ほどまでの緩慢な動きは何だったのか、というほど素早く着替えると、アーノルドは勢いよくドアを開け放ち、部屋を出た。

シャツもジャケットも羽織っただけ。ボタンは留めきっていないので、細身ながら鍛えられた上半身があらわになっている。

とても花嫁に見せる姿ではないが、必死なアーノルドは気づいていなかった。

「あ、ちょっと。ボタン留めてないし、そんなぼさぼさの頭で行くんですか⁉　待ちなさい、アル！」

つい、子供の頃のように叱責するコンラッド。けれどその声も届かず、アーノルドは走り去っていった。

✽　✽　✽

ヴィオレットがアーノルドの屋敷に到着する一時間ほど前のこと。

マルス王国に向かう汽車に乗っていたヴィオレットは、沈んだ気持ちで深くため息を

立ち読みサンプルはここまで